

MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT



マミヤカメラクラブ

マミヤカメラクラブはマミヤカメラをご愛用の方ならどなたでもご入会いただける写真クラブです。マミヤカメラクラブ会報誌 (Mamiya Gallery) の発行 (原則年2回)。プロ写真家による撮影会・勉強会・セミナーの開催。webギャラリーで会員の作品展示。マミヤ製品修理・点検料金の割引等と会員特典もたくさんあります。マミヤカメラに関する情報、会員相互の親睦と写真技術向上をめざし、素晴らしい写真の世界をご堪能ください。



入会費用

入会金 1000円 (税込)
 年会費 3000円 (税込) ご入会日より1年間。
 ※但し2年分の年会費をご入会時にお納めください。

特典

- マミヤカメラクラブ会報 (Mamiya Gallery) の発行。
- クラブ撮影会の開催。
- 勉強会・セミナーの開催。
- ホームページ上に会員作品ギャラリーの開設。
- マミヤ製品修理・点検料金の割引。
- 会員証、オリジナル会員バッジ提供。
- オリジナル会員名刺制作 (有料)。

●製品・修理に関するお問い合わせは、東京サービスセンターへご相談ください。

- 修理をはじめオーバーホール、清掃等を承ります。
- 東京サービスセンターショールームにはマミヤ全機種を展示しています。
- 実際に製品を手にとって操作性や質量感を確かめられます。また、選定のアドバイス、操作上の疑問にもお答えしています。

マミヤ・デジタル・イメージング株式会社

東京サービスセンター
 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-18 1F
 TEL.03-5577-6861 FAX.03-3219-0050
 営業時間 9:00~17:50 土、日は休業



マミヤカメラクラブ事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 ワイズビル 株式会社ワイズクリエイト内
 TEL.03-5689-2776 FAX.03-5689-2786
 E-mail :info@mamiya-club.com

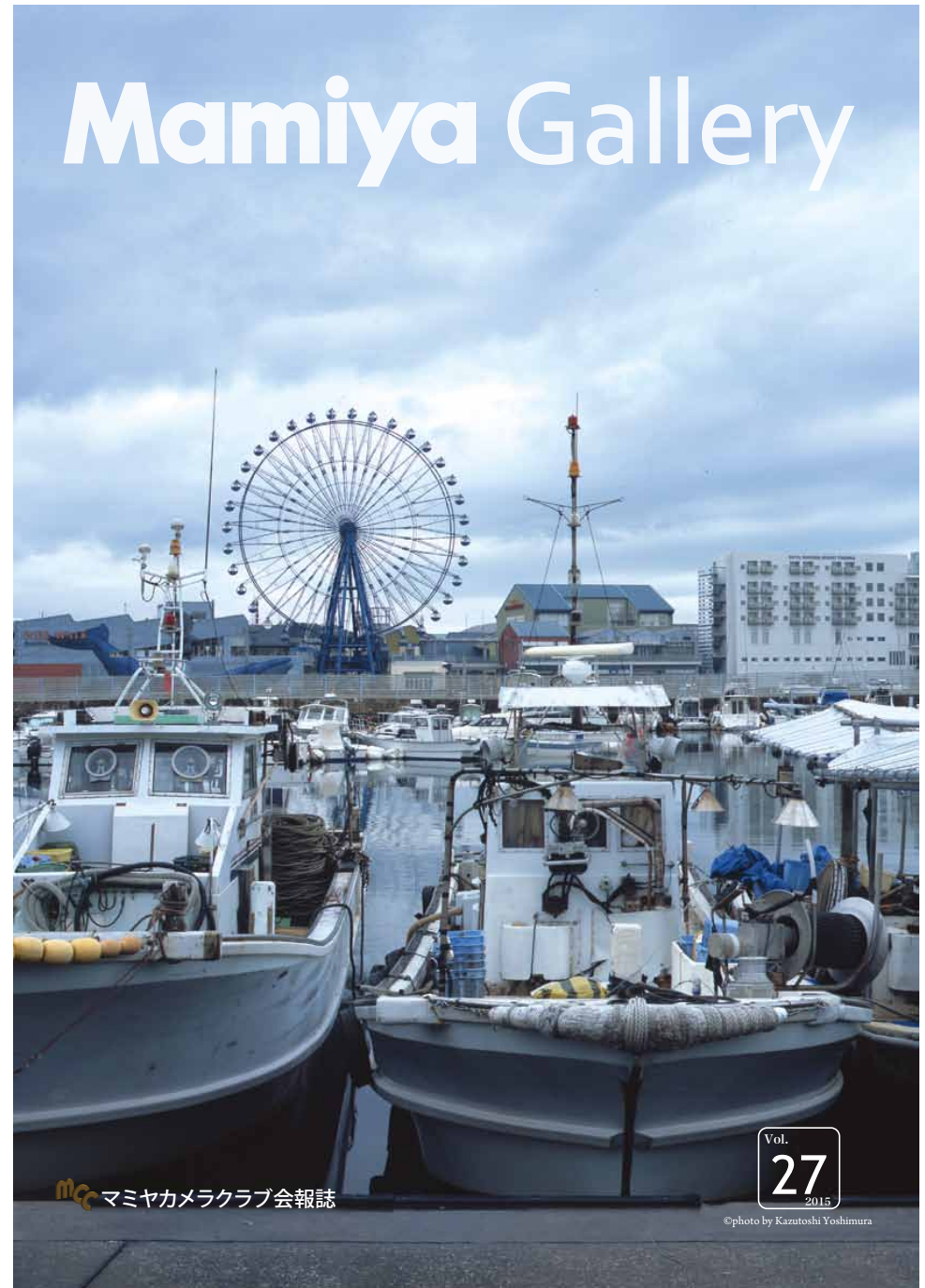
- マミヤカメラクラブの入会お申込み等お気軽にお問い合わせください。
- 撮影会・イベントのお申込み・お問い合わせを承ります。
- 下記、ホームページでも詳しくお知らせ致しております。是非ご覧ください。

マミヤカメラクラブホームページ <http://www.mamiya-club.com/>

●株式会社ワイズクリエイトでは、下記のような業務を行っています。

- ◎マミヤカメラ製品・大判カメラ販売を致しています。
- ◎撮影アクセサリ、ザックの販売を致しています。
- ◎プロラボ現像・プリントを承ります。
- ◎撮影会・ワークショップ・セミナーを開催しています。

ワイズクリエイトは写真を通じて人と人、人と自然とのコミュニケーションを確立する事を目的とするフォトオフィスです。
 大判カメラ専門ショップを展開、自然写真家、山岳写真家による写真セミナー、撮影会の開催、写真集の出版、写真レンタル、各種制作業務等、写真に関するソフトとハードあらゆる業務を行います。
www.yscreate.co.jp



Mamiya Gallery

MCC マミヤカメラクラブ会報誌

Vol. 27
2015

©photo by Kazutoshi Yoshimura



写真家・吉村和敏はなぜ写真集出版に拘るのか。

酷暑が続く8月のある日、今一番人気のある写真家と言っても過言では無い吉村和敏さんが本企画のインタビューのため来社されました。出立ちも若々しくとも47才という年齢には見えず、その場を一瞬で華やいだ雰囲気してくれました。

自らを行動的と語る吉村和敏さんは本当に多忙で、数日前にベルギーの取材から戻られたばかり。この日も写真コンテストの審査をこなしての来社でしたが、直ぐに北海道〜カナダへと取材に出掛けられるそうです。そんな中の2時間インタビューですが、主に写真集出版に話題を絞りお話を伺いました。話の内容があまりにも広義でありながら奥深いために聞いているだけで多くの驚きを覚えます。今年は4〜5冊の写真集を出版する予定との事で、今の時代こんなに写真集を積極的に出版する写真家はいませんのでこの辺りにも迫りたいと思います。(木戸)



Q.本(写真集)作りについて?

作る本(写真集)全てが売れる訳ではありません。今まで30冊以上の本を出版してきましたが、中には売れない本もあります。本の制作過程で「この本は売れる。この本はあまり売れない。」というはある程度予測が付きます。そんな時は出版社と発行部数の調整をします。特に自分で拘ったテーマは売れない傾向にありますね(笑)。それでも「拘りのテーマ」は写真家として撮影が本当に楽しいから積極的にやっていくつもりです。売れる本が在るから継続できることでもあります。

どのプロジェクトも最低2年の時間は掛けています。本作りの大事な点は「クオリティの維持」です。沢山の本を同時進行で作る事は大変ではとの意見もありますが、これは長年の経験による慣れと、活動的な性格があり、全く苦にはなりません。まるで何時も泳ぎ回っているマグロの様ですね(笑)。写真家として独立してカナダで1年過ごしてきたときからずっと今日まで動き回っていましたよ。



上段 (左)シチリア州ガンジ:バレルモから南東に約80km、マドエニ山脈の一角にある標高1010mのマロネ山を中世の家並みが一面に覆っている。(中)イタリアで最も美しい広場のひとつと称されるベンティボリオ広場が自慢のエミリア・ロマーニャ州のガルチエール村。(右)ヴァッレ・ダオスタ州のエトロープ村。グラン・サン・ベルナド渓谷にある小さな村には、今でも細い路地や新鮮な水が湧き上がる給水場があり、家々は花であふれている。(上)アブルツォ州パチエントロ、国立公園の中に位置し、10世紀に築かれたカロードーラ城が堂々と建つ。13-15世紀に増築された広大な城となる。(左)リグーリア州ヴェルナツァ、世界遺産チンク・テッレの村のひとつ。海に小さく突き出た岬の上に作られた11世紀の城塞が村のシンボルである。※写真集『イタリアの最も美しい村』全踏破の旅より。

Q.何故多くの本(写真集)を出版されるのですか?

20代の頃から、何かをやったら形(本)にする事を心がけていました。一つのテーマが出版という形で完結すれば、頭を切り換えて次のステップに進めるのです。私は写真界にいても本にこだわる出版の人間だと思います。連続して本を出すには多くのネタがなければできませんが、常にテーマの抽斗を五つ程持っていて同時進行で管理しています。

旅の中からテーマが生まれる事が多く、2009年に出版した「フランスの美しい村 全踏破の旅」から、今年出版した「イタリアの最も美しい村 全踏破の旅」が生まれ、更に取材から帰国したばかりですが「ベルギーの最も美しい村 全踏破の旅」の出版へと繋がります。

Q.五つの抽斗について教えてください?

ひとつ目は先程の「最も美しい村シリーズ」。二つ目は8x10インチカメラで撮影した2013年出版の「積雪」に続き、今年11月に出版する「KANRANSHA×観覧車」の8x10シリーズです。三つ目は9月に出版する「雪の色 Colors in Snow」。四つ目が「Moments on Earth モーメントズ オン アース」と言って1985年から2015年に発表した作品が全て収録された初のベストショットアルバムです。そして五つ目が今年出版できるが微妙ですが「五島列島」です。

この抽斗は形を変えたり、色を変えたりと6個にも7個にも変化します。頭の中にはいろいろあって、私には見えない鉄道写真や飛行機写真、乗り物写真、また得意の日本の軽トラックをまとめたテーマなど沢山の抽斗が増えることも考えられます。未だお話しできませんが、あっと驚くテーマの写真も機材の準備が始まっています。



シュナイダーレンズ付きの愛機・エポニー8x10インチカメラを構えて(ワイズオフィスにて2010年撮影)。
※表紙:写真集『KANRANSHA×観覧車』より





北海道名寄市



山形県東根市

Q. 本（写真集）作りのヒントと楽しさ？

本作りのヒントというのは現在進行しているプロジェクトにあります。一回の旅で必ず次のテーマが生まれるのです。例えば、「センス オブ ジャパン」という本の取材過程で雪の撮影がありました。次にはこの「雪」だけをまとめた本を作ると「積雪」と「雪の色」という本ができました。撮影の旅をしていると自分の感性に引っ掛かる被写体が絶対あります。また、色々な分野で活躍する人に出会うことでテーマを見つける事もあります。

撮影時には製本された本の最終形をイメージして、何が足りないかを考えて撮っていきます。家や自動車の被写体であったり、赤色、黄色、緑色などのカラーであったりします。

本作りが一番楽しい仕事ですね。「セメント」が出版された時のように、自分で企業（太平洋セメント）に提案書を送り、担当者と会って段取りをして撮影を行う事など多々あります。先週も2件の提案書を企業に送りましたよ。

ヒントから生まれたテーマを自身で構成し、デザイナーや編集者と打ち合わせを行う。これらの事で1年の半分以上を取材（撮影）に費やしていますが本当に楽しい。「イタリアの最も美しい村」の様に文章が沢山ある本は、記載内容の文責を負わなければならないので凄く大変ですよ。何日もファミレスに籠もって仕事をしていました。

Q. 本（写真集）の販売について？

本を出版するに当たりどの様にして販売するかは考えていません。本を出すだけで売れていく時代と違い、出版不況で出版社や取り次ぎ、書店が少なくなっているのが現実です。カレンダー等の企業制作物や雑誌の仕事やコンテストの審査などいろいろ仕事もしていますが、本でなければ伝えられない世界を表現したいという思いは強く、写真展や講演会、ホームページ等で地道に販売できたらと思っています。

Q. フィルムとデジタルについて？

カメラはフルサイズデジタル、中判デジタル、そして4x5インチと8x10インチの大判フィルムカメラを使っています。各々長所短所がありますが、これらの良いところを引き出す様に今後も使い続けて行こうと思っています。「美しい村シリーズ」の様に沢山のカットが必要なものや海外取材や夜景、人物、動きのある被写体は絶対にデジタルが有利です。しかし、デジタルは「緑」の再現性が弱く、RGBをCMYKに変換すると発色も難しいし、深みが出ないので、この様な被写体の時には大判カメラを使います。大判フィルムカメラで撮影するとフィルム代、現像代などのコストも掛かりますが1カット、1カットを撮影する楽しさは格別です。



秋田県横手市



北海道稚内市

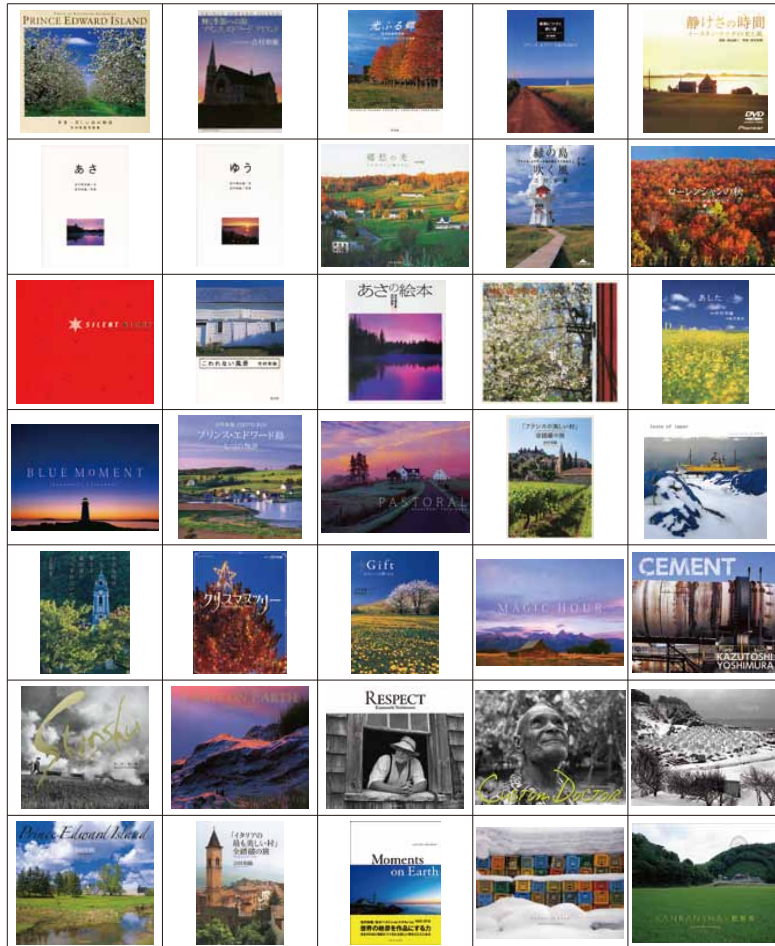


北海道天塩郡豊富町



青森県平川市

写真集「雪の色 Colors in Snow」より



Q. 写真展開催について？

写真展と本の出版をリンクさせることもあります。この作品は写真展で表現したいというときには皆さんと一緒に出版審査に出していますよ。力の入れようは写真集7割に対して写真展3位割くらいでしょうか。というのも主催者が費用を全部持ってくれる場合は別として、写真展開催では利益を生み出せない。100~200万円を掛けるのなら本を1冊出したい。しかし、作品をパネルに加工しておけば全国で写真展を開催できるなどのメリットはありますね。



吉村 和敏(よしむら かずとし)

1967年、長野県松本市で生まれる。県立田川高校卒業後、東京の印刷会社で働く。退社後、1年間のカナダ暮らしをきっかけに写真家としてデビューする。以後、東京を拠点に世界各国、国内各地を巡る旅を続けながら、意欲的な撮影活動を行っている。自ら決めたテーマを長い年月、丹念に取材し、作品集として発表する。絵心ある構図で光や影や風を繊細に捕らえた叙情的な風景作品、地元の人々の息づかいや感情が伝わってくるような人物写真は人気が高く、定期的に全国各地で開催している個展には、多くのファンが足を運ぶ。近年は文章にも力を入れ、雑誌の連載やエッセイ集の出版など、表現の幅を広げている。2003年 カナダメディア賞大賞受賞 2007年 写真協会賞新人賞受賞

Q. 新刊本「KANRANSHA×観覧車」について？

「KANRANSHA×観覧車」は8x10 インチカメラにより撮影した写真集で、発色テストの結果ポジフィルムのプロビア100Fで撮影しています。日本各地に200箇所以上在る観覧車を3年掛けて約120箇所撮影しました。観覧車の周りをぐるっと廻り、下調べをしてからベストポジションで撮影していますが、観覧車を日本の風景写真として捉えている作品です。

Q. 今後の夢について？

オリジナルプリントの販売もしたいと思いますね。大先輩の前田真三さんみたいにオリジナルプリント等売れる拠点が在ったらいなと思います。夢の段階ですが何処かに小さなギャラリーを作り「本の個展」を常時開催し、ここに行けば吉村和敏の本が全て買える何てなったら良いですね。

現在は1年の半分以上を撮影に出掛け、そのうち海外が7で国内が3の割合ですが、日本国内は被写体の宝庫です。日本の風景は本当に美しい、海も川も湖も沼も撮影したいものがいっぱいです。



5ページ Amazonでも「吉村和敏」とインプットするとこんなに沢山の写真集が検索されます。
 6ページ 2013年ニコンサロンにて開催の「カスタム・ドクター」写真展会場でのスナップ。
 上2枚の観覧車の写真は8x10インチオリジナルポジ(プロビア100F)よりスキャニングして掲載していますが、残念ながら本誌の印刷クオリティでは大画面フィルムの描写力が忠実に再現されていません。
 11月発売予定の写真集を是非お求めください。



『白 樺』 MamiyaRBproSD KL65mm RHP III
月夜に佇む白樺を見上げました。

『 Mamiya とともに 』

金田 大樹

我が家のある菅平高原は農業と観光が盛んな標高 1300mの高原地帯にあります。昼間は花に囲まれ、夜は埋め尽くすような満天の星空。私が写真を始めたきっかけは、この豊かな自然環境と中学の頃に始めた天体写真でした。フィルムでの長時間露光、肉眼では見えない光を楽しんでいました。その後、天体写真の分野は冷却CCDに移行していく訳ですが、機材の購入もままならず、撮影対象は天体から風景に変わっていききました。その頃出会ったのがMamiya RBproSDでした。

RBproSD はフィルムバックが交換でき、様々なフィルムを振り回せることができました。フォーマットも 645 から 68 まであり、デジタルバックもつけることが出来るなど、拡張性が高いカメラです。何より豊富なレンズ群は大きな口径で、空気さえ写し取る思いがしました。フィルター径も 77mm で統一されるなど細やかな配慮もされています。風景写真を撮ったり、冬の最低気温が -20 度まで下がる当地では電池が不要というのも大きな魅力でした。

芸術分野への進学も興味がありましたが、農業大学校を卒業後就職。農業経営もここ十年くらいで一気に変化してきました。販売も農協一任から自分で販路を切り開く必要に迫られました。そこで商談会に使うポスターなどの写真も自分で撮るようになりました。フィールドでの商品撮影にもMamiyaは頼りがいがありました。645AFD II も使っていましたが、やはり RBproSD+ZD Back の組み合わせは野菜の瑞々しさを表現できると思いついてからまだ現役です。

Mamiya が Schneider と ALPA を扱うようになりいつの間にか RB、RZ、7 II が生産終了。一抹の寂しさを感じながらも新しい表現を求めてマクロジンマー 120mm、ALPA 12 TC が仲間入りしました。商品撮影にはマクロレンズは必須ですし、広角を得意とするALPA はすばらしいコンパクトカメラです。特に Schneider、ALPA レンズの解像には驚く物があります。私の日常生活の中には常にカメラがあります。好きな風景写真だけでなく、日常の一コマを鮮明に記録できるカメラはなくてはならない存在です。いつもサポートしていただいている Mamiya の皆さん、新旧 MCC 事務局の皆さんには、今後も自分だけの表現を追求していくことで返返しできたらなぁと生意気なことを思っております。ありがとうございます。

mail*orion@ued.janis.or.jp Facebook*<https://www.facebook.com/daiju.kaneda>



左：『流れ』 ALPA12TC 35mm RVP100 ALPA の性能に驚いた一枚です。
中：『耐えて』 トヨGX マクロジンマー HM 120mm RVP F 根元が割れてもおおっ張っていました。
右：『静 寂』 トヨGX マクロジンマー HM 120mm RVP F 廠裏の空気も凍る静けさの一枚。



マミヤカメラユーザーを訪ねて。

金田 大樹 (かねだ だいじゅ)

Mamiyaカメラクラブ所属
菅平高原にて長寿園 (<http://www.ued.janis.or.jp/~choujuen/>)
を経営。
Mamiya RBproSD、ALPA 12TC、4x5 他
テーマ『Mamiya とともに』。



左：『姉 妹』
Mamiya645AFD2 マクロ 140mm 400TX
B&W の一枚。質感をよく表現してくれます。
中：『興味津々』
Mamiya645AFD2 645AF105-210 PN400N
10 年ほど前の一枚。日常の一コマ。
右：『卒園の朝』
Mamiya645AFD2 645AF105-210 Z.Dバック
大切な日もしっかりと記録してくれます。



『開 花』
MamiyaRBproSD セコール フィッシュアイ RVP
Mamiya645AFD2 645AF105-210 RVP F
MCC フォトコン剣賞、畑の風景です。一生懸命に育てています。



『アメリカ ロメインナス収穫風景』
Mamiya645AFD2 645AF105-210 RVP F
アメリカでは Mamiya がとても人気でした。



左：『フクジュソウ』 MamiyaRBproSD KL65mm Z.Dバック 春の日差しのおかげで進む畑の脇に咲いていました。
中：『もろこし』 トヨGX マクロジンマー HM 120mm RVP F 干して冬に備える昔の知恵ですが今では野鳥の餌になります。
右：『コーラセ』 MamiyaRBproSD KL75mm Z.Dバック 畑での撮影が多いので Mamiya は役立ちます。



技術の結集・信頼のラムダザック

ラムダ社・佐久間 博社長に聞く。



佐久間 博(さくま ひろし)
1936年東京・中野生まれ。
有限会社ラムダ代表取締役。
趣味は山岳写真撮影、登山、
油絵など。山と写真の出会い
は中学生の時。

池袋から東上線に乗り新河岸駅で降りると佐久間社長がわざわざ自動車で迎えに来てくれました。そのまま麓屋さんに直行し川越の美味しい鰻重をご馳走になってしまいました。その後、ラムダ社に移動し約1時間半にも及ぶインタビューや写真撮影などにお付き合い頂きましたが、佐久間社長がラムダ社を立ち上げるまで経緯や「ラムダ」の名前の由来、カメラザック造りの拘り等と普通では聞くことが出来ないお話を楽しく聞かせていただきました。(木戸)

有限会社 ラムダ
〒350-1137
埼玉県川越市砂新田 3-18-17
TEL 049-246-1380
FAX 049-246-1546
【ホームページ】
<http://www.lamda-sack.com>
【Eメール】
inform@lamda-sack.com



Q. 写真と山の出会いとラムダ独立の経緯は？

中学生の時(昭和23年～24年頃)、長兄が旧小西六に勤めていて、会社からセミパルを借りて来て、写真に興味を持ち始め写真の面白さを知りました。高校に入り同じクラスにカメラ好きがいて、内田亮(元シグマ専務)でした。内田の父は山岳写真家(内田耕作先生)で、高校時代、内田と一緒に秩父の山や北アルプスの山々に連れて行ってもらい、山と写真の洗礼を受けました。高校卒業後、当時は登山ブームで家の近く(高円寺北口)に山岳会が集まっているのを知り、山岳会に入会しました。会は谷川岳がホームグラウンドで、新人の頃はマチガ沢、南面の沢を登り、一の倉沢は良く登りました。昭和36年5月、会の合宿1ヶ月で北海道の利尻岳と知床のラウス岳に登り会社を辞めて行きました。

この後の事が「ラムダ」を作るきっかけになったかもしれませんが、当時姉夫婦が下着の販売会社を経営しており、業務拡張で自社工場を設ける事になりました。これを手伝おうと裁断・縫製の仕事を始めました(因みにこの時職場で知り合い結婚したのが奥様です)。この仕事を10年ほど経験した後、山岳会の友人が経営していた四谷のチョゴリザと因う山岳用品専門店に転職しました。ここはオリジナルの登山靴や山スキーなど山用品を積極的に企画・製作・販売していて、裁断・縫製の仕事の腕を活かす事が出来ました。

住まいを今の川越に移し独立したのが今から32年前(1983年)でした。最初の2年間は何から何まで1人で仕事をしながらカメラケースとレンズケースを製造していましたが、3年目に家内も仕事を手伝うようになりカメラザック1型、2型、3型の製造が始まりました。



1階仕事スペースには縫製用ミシン3台が並びます。一番奥が佐久間社長の奥様、奥様とお二人のベテランのスタッフの手で造られる製品が出て行きます。

Q. 「ラムダ」ブランドについて。

独立したときから「ラムダ」のブランドで製造していましたが、この「ラムダ」の名前は、内田耕作先生に付けてもらいました。先生は山岳写真のパイオニア、日本山岳写真協会の創立メンバーで、私も先生と風見武秀様の推薦で、1975年日本山岳写真協会に入会しました。先生にはいろいろアドバイスを頂き、3型を作った時は中々良い評価が貰えずに何度も試作して、やっとOKを頂いたのを覚えています。

Q. ザック作りのコンセプト・特長は。

創業当初から、登山用リュックとカメラリュック両方の機能を持ったザックとして製造していますが、重要なのは、ある程度の衝撃からカメラを保護するクッション材を使いながらザック本体を軽くし、更に荷物・カメラの出し入れがし易い設計ということです。また、用途に合わせているなサイズ、嗜好に合うようカラーバリエーションも各用意しています。

カメラザックは、実際に私が山に登って撮影した経験や、プロの山岳写真家からのアドバイスを頂いて作っています。「霧ヶ峰」というザックからシステムザックと言う名称を使っていますが、これは雨蓋やサイドポケットの装着や取り外しが可能で、ユーザーが使いながら変化させる仕様になっています。

Q. ラムダザックは一生モノ？信頼と安心のラムダ。

ラムダザックは本当に丈夫に出来ています。例えば長く使って、ある部分が壊れても何時までも修理が出来ます。20年前のザックを修理品として預かる事も多いです。よく古いモノは修理を断ればと言われるのですが、「使って貰って有り難い」と思う気持ちとお客様の「ありがとう」と言う声に支えられ何時までも修理を受け付けるのです。こんな事で2個目のザックもラムダと言われ、1人で3～4個のラムダザックを使われている方も多いです。正直なところモデルチェンジした新製品は、より使い易さを追求していますので、ある程度で買い換えて頂ければ嬉しいですね(笑)。

Q. カメラ機材の変化に対応？新製品は「ライチョウ」!

大判カメラや中判カメラを収納できる、ある程度容積の大きいカメラザックから、デジタルカメラの普及につれ、一眼デジタルとレンズ2～3本の容積で済んでしまうカメラザックへと大きさの変化はありますね。大きなザック以外にも今の時代に対応したザックを開発しないといけないと思います。そのひとつが、この秋発売予定のスナッピーザック改良型「ライチョウ」です。山や街と各場面で見られるのが特長です。ご期待ください。従来のカタログやホームページはもちろん、いろいろな方法でメイド・イン・ジャパンのラムダザックの良さをPRして行きたいと思っています。



Q. 写真家としての佐久間社長は？

登山と山の写真を撮影する経験が、製品作りに反映されている事は言いましたが、昔は山の写真を撮影し、山岳雑誌等に持ち込んで特集してもらったり、コンテストに応募したりしていました。実は、山岳写真家になるのが夢だったのです…。自分で写真展を開いたり写真集を出したりすれば宣伝になるかも知れませんが…。



佐久間社長のオリジナルポジを見せました。昔の「山と渓谷」誌の見聞記特集には確かに「撮影：佐久間博」と記載されていました。カメラはペンタックス6x7を35年、今は富士フィルムのTX-2カメラを使ってパノラマ山岳写真を撮影されています。

写真をキーワードに生の声を聞く。この人を訪ねて ⑥



(上)2階は製品の保管スペースと各種ザックの型紙等を収納しています。(下)大きなテーブルは佐久間社長自ら型紙を使い生地を裁断します。「槍ヶ岳」の実際の型紙をテーブルの上に並べて裁断方法をご説明頂きました。



(左)9月20日発売の「ライチョウ」はタウンユースもOKなお洒落な出来映えです。ワイズクリエイトでも注文受け付けますよ。(中)製品カタログ。(右)ホームページ。

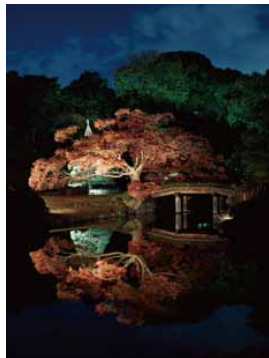


RAW 現像ソフトウェア Capture One Pro 8 Vol.2

フェーズワン ジャパン プロダクトマネージャー 下田 貴之

今回は 1枚の写真を仕上げるまでの行程を紹介したいと思います。

調整前の写真もとてもダイナミックですが、Capture One で少し調整を加えると調整後のように違う雰囲気の写真をつくることができます。



調整前



調整後

主に使用する機能は部分調整という機能で、ブラシで選択範囲を付けるだけで部分的に明るさを変えたり、ディテールを鮮明にすることができる便利なツールです。

まず中心にある楓の紅葉をより鮮やかに強調するために、ホワイトバランスの数値を上げます。彩度などで調整せず、ホワイトバランスを暖色系に調整することで赤色を表現します。そして、葉や枝を鮮明に表現するため「クラリティー」を使用して細かいディテールを調整した後、「ハイダイナミックレンジ」でハイライトとシャドウのトーンを整え画像全体を整えます。

ホワイトバランスはRAW 現像の中でもとても重要な調整です。この調整によって色が変わり写真全体のイメージが変わるので、最初にホワイトバランスの調整を行ってください。

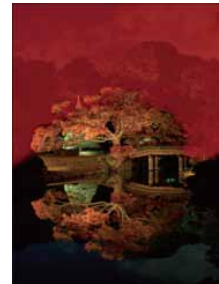
次に部分的に調整を加え、楓を引立てていきます。空や木々が明るく、彩度が高いので「部分調整」で背景を選択し「露出」と「彩度」で整えます。



図 2



図 1



次に中心の楓を選択し、「クラリティー」と「露出」、「ハイダイナミックレンジ」を使用して葉と枝の鮮明に表現します。最初の調整でも使用しましたが「クラリティー」機能はとても有効な機能です。マイクロコントラストを調整し被写体を鮮明に調整することができるので、風景写真などで葉や枝を鮮明したいときにとても便利です。

そして、楓のハイライト部分も別のレイヤーで選択し「露出」で強調し立体感を出します。



図 3

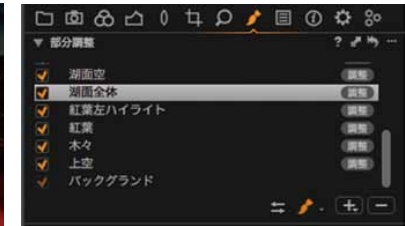


後は水の映込みを選択し「露出」で明るさを抑えて完成です。

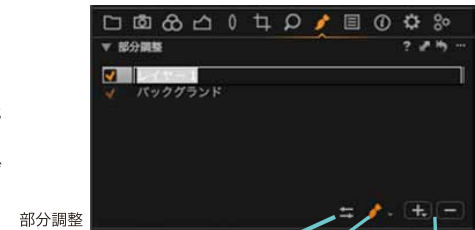
難しいテクニックを使用せずに部分的に露出を変えただけで、全く雰囲気の違う作品をつくることができます。



図 4



Capture One の利点は専門的な知識がなくても直感的に調整ができ、このような作業が画像劣化なくできる点だと思います。全く Photoshop を使用しなくても作品を仕上げられるますので、ぜひ様々な作品づくりに Capture One を活用いただければと思います。



部分調整
ブラシのサイズ、ポケの調整
ブラシ、消しゴムの切替 レイヤーの作成、削除

中判デジタルカメラの魅力と Capture One の紹介

講師：マミヤ・デジタル・イメージング
福澤 強志 荒巻 保光

- 日 時 10月16日(金) 13:30~16:30
- 会 場 湯島地域活動センター 文京区本郷7-1-2 (事務局徒歩3分)
- 参加費 1000円(税込)
- 定 員 10名
- 申 込 事務局 (03-5689-2776) 必ず事前にお申し込みください。
- 特 典 中判デジタルカメラバック特別価格販売があります。



チャレンジ！写真展



あなたも夢の写真展開催に チャレンジしてみませんか？

写真撮影を趣味としている方の夢は、「いつかは写真展を開催したい」という事の様です。実際に写真展を開催するには、写真展コンセプトの確立、会場申し込み、作品セレクト、告知方法、プリント制作、展示方法など、いろいろな問題をクリアしなければなりません。そこでワイズクリエイティブでは、面倒な諸問題の解決をお手伝いして、あなたの写真展開催の夢を実現できたらと考えています。

作品内容は？

海外旅行に行ってきたから写真展をやりたい！と聞くことがありますが、写真展を開催するには一過性の写真ではなく、テーマを持って長年撮り続けた作品を厳選し発表する事が大事だと思います。特にアマチュアカメラマンの場合は被写体に対する思い入れや拘り、愛情を作品にするのが良いと思います。また、何枚の写真があれば写真展を開催できますかと聞かれることがありますが、経験上作品発表数の10倍以上の写真があるという構成が可能になると思います。更に、作品セレクトに自信が無い場合はプロのアドバイスを受けることもできます。



項目	内容
1. 写真展のコンセプト	写真展のコンセプトを明確にし、展示作品のテーマを決定する。
2. 作品の選定	撮影した作品の中から、展示に相応しい作品を選定する。
3. 会場探し	写真展を開催する会場を探し、申し込みを行う。
4. 告知方法	写真展の開催情報を告知する方法を決定する。
5. プリント制作	展示作品のプリント制作を行う。
6. 展示方法	展示作品の展示方法を決定する。
7. オープニングパーティー	写真展の開催を祝うパーティーを開催する。
8. 事後処理	写真展の開催後、作品の回収や会場の手配を行う。

4切りプリントで作ったポートフォリオ(上)、これが最も大事な6ヶ月分の写真展行程管理表(下)。

写真展会場のスケルダウン壁面を作って展示順の確認をします。もちろん作品も同縮尺となっているので展示イメージが一目瞭然。



写真展会場として人気No1の富士フィルムフォトサロン

写真展会場は？

喫茶店の一角で写真を飾るミニ写真展は容易いでしょうが、「○○サロン」や「○○ギャラリー」とある名称の写真展会場では必ずと言って良いほど「事前審査」があります。これには、「こんな写真展を開催したい」というコンセプトのしっかりした作品写真を、30点ほどにまとめたポートフォリオを作成し提出をします。会場により審査期間等違いますが、審査の結果めでたく写真展開催決定となったら、会場毎の「開催の手引き」を熟読し、自身でも「写真展行程管理表」等を用意しチェック体制を強化しましょう。もちろんこれらの事もワイズクリエイティブがお手伝いを致します。

写真展案内はがきと告知方法？

写真展開催が決まったら、写真展案内はがきに採用する写真を選びましょう。1枚で写真展を語るインパクトのある作品を選びますが、印刷映えする写真を選ぶという事も大事です。また、印刷枚数はどの位必要かを把握します。追加印刷は不経済なので少し多めの数量を印刷しましょう。そしてこの案内はがきを、いろいろな場所に置いてもらう事も重要です。他にカメラ雑誌や新聞社にも写真展開催のプレスリリースを行います。ギャラリーが独自にプレスリリースをする場合もありますが、自身でアポをとってこれらを訪ねても良いかも知れません。勿論写真展はがき制作と

プレスリリースの実施もワイズクリエイティブがお手伝い致します。

プリントとマット加工、図録、キャプションなど？

夢の写真展開催ですから、プリントもプロラボに依頼します。ワイズクリエイティブではプロラボとの契約で、ポジフィルムからの全紙サイズ以上のプリントについてはドラムスキャナでデータ取り込みしています。プリントの濃度域も広くなり素晴らしい出来映えとなります。次にプリントの色校正ですが、必ず初校と再校を行い、より再現性に長けた、自分のイメージに合ったプリント仕上げを目指します。出来上がったプリントをマット加工にするのか、アルボリック加工、断ち落とし加工にするかは事前に決めてスケジュールに組み込んでおきましょう。会場でお客先にお渡しする出展図録は、出展作品を記載したミニ写真集の様な図録をお薦めします(写真集も良いですよ)。他にタイトル入りのキャプション、挨拶ボード等も展示を左右する大事な設備です。



新聞社・雑誌社などのリストもワイズクリエイティブにありますのでプレスリリースすることにより有効な宣伝が可能です。(上)。プレスリリースの結果、カメラ雑誌と新聞にも紹介されました(下)。



プリント校正(左)は初校、再校の2回実施。2段仕様のキャプション(中)、会場に配布する写真展図録ですが、良いものを制作すれば必ず持ち帰るだけでなく、保管もしてくれます(右)。



プロの設置業者ならば1~2時間で設置可能です。また加工された作品の搬入・搬出も行ってくれますので是非とも頼りたいですね(左)。写真展がオープンすると沢山の来場者が訪れます。これは事前の写真展案内はがきの配布やプレスリリースの成果によって決まります。(中)、いよいよ写真展の開催です。会場では芳名簿の用意も忘れずに(右)。

写真展搬入と展示、そしてオープニング？

搬入・設置展示を自分達で行っているのでしょうか、展示作品の水平が出ていなかったり間隔が揃っていないかたりする写真展もあります。しかし、写真展は減多に出来る訳ではありませんので、展示設置はプロの業者に任せましょう。通常マット加工してくれる業者が代行してくれます(ギャラリーではプロ業者の展示設置以外不可なところが多いです)。そして、いよいよ写真展の開幕です。個展ならば期間中は全日アテンドとなるでしょうが、必ずお助けスタッフをご家族、ご友人にお願いをしておきましょう。沢山の方が来場されれば大成功ですね。

オープニングパーティーも？

写真展は一世一代のイベントと言っても過言ではありません。ご家族、知人、友人を招いてオープニングパーティーを開催しても良いかもしれません。ご希望の方にはオープニングパーティーの段取り等もアドバイス致します。案内状の制作や発送、更には集計業務まで行います。もちろんパーティー次第の相談も任せてください。

何でもご相談ください。

以上が写真展開催の大まかな流れです。ご不明な点などあれば何なりとワイズクリエイティブ・戸手までご相談ください。そして是非貴方の夢の写真展を実現してください。



参加者リストがあれば、オープニングパーティー案内状の印刷や返信はがき等の封入を行い、投函です(上)。パーティーの主役はもちろん貴方です。皆さんからの祝福を受けてください。(下)



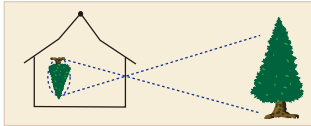
東京に猛暑日が続いたある日、大判カメラを持ち東大構内に出かけました。目的は特集記事「大判カメラのすすめ」の撮影。大判カメラで針穴（ピンホール）写真撮影をしようとワズオリジナルのピンホールシャッターを用意していざ出陣。蛇腹機構を採用した大判カメラでは、針穴写真を撮影する時、蛇腹の長さにより、超広角～広角～標準～望遠～超望遠とズームレンズのように自由な画角で撮影できるのです。またバックアオリを使用することで、「形の修整アオリ」も可能なのです。安田講堂と三四郎池の間にリンホフカメラを構え、画角を決めインスタントフィルムを使用しどんどん作例写真を撮影していきます。「終わった！」予定枚数を撮影し道路に置いたインスタントプリントを眺めていると・・・ポタポタ・・・あっ！出来上がったプリントの上に顔からの汗が・・・もちろん再撮です。トホホ、こんな暑いのに。それでは皆さんピンホール写真をお楽しみください。（木戸）

大判カメラのすすめ その7

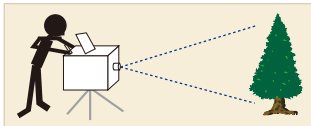
ピンホール写真って何？

ピンホール写真はレンズを使用しないで光を通す小さな穴（ピンホール＝針穴）をレンズの代わりにするもので、専用のカメラの事を針穴写真機と言います。光学的なレンズを使わない事で露出を稼ぐためにどうしてもスローシャッターになるので、なんとも味のある写真が撮影できる事からピンホール写真ファンは多いと言われています。またカメラの発明は、下のイラストのように穴の空いたテント内に外の景色が映し出された事が始まりで、その後、この方式で箱を作り投影された画像をペンでなぞって楽しんでいました。要するにピンホール写真は写真の原点なのです。

①テントに開いた穴により投影された画像を楽しむ。



②箱に開けた穴と鏡等を利用して投影画像をペンでなぞり楽しむ。



大判カメラのピンホール写真は？

大判カメラの構造は簡単に言うと前枠と後枠を蛇腹でつないでいるのが基本です。ならば前枠部分にピンホールシャッターを装着し、蛇腹を可変させれば簡単にズームピンホールカメラができてしまうことになります。また、大判カメラのアオリの一つバックアオリを使用すれば、ピンホールカメラでも被写体の形の修整が可能となり普通のピンホールカメラでは撮影できない領域を楽しむ事ができます。



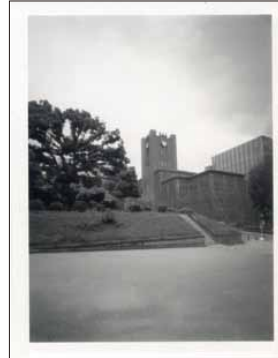
《広角、標準、望遠で撮影》 大判カメラを使い蛇腹の伸張量を調節すれば、広角、標準、望遠レンズを使った同じ様なピンホール写真を撮影する事ができます。(左)は蛇腹を短くして広角レンズ仕様に。(中)は蛇腹を約150ミリに伸ばして標準レンズ仕様に。(右)は蛇腹を思いっきり伸ばし望遠レンズ仕様にしました。この様に大判カメラだと蛇腹の長さを調整するだけで、まるでズームレンズを使う様にピンホール写真を楽しむ事ができます。



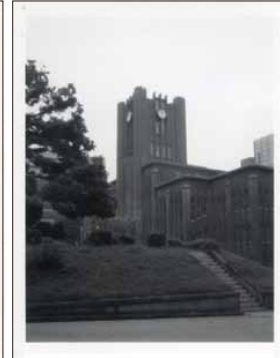
《アオリ撮影も可能》 写真は同じピンホール撮影時のものですが、(左)がノーマル撮影で、(右)が大判カメラのバックアオリをかけたアオリピンホール撮影状態です。アオリを使う事により垂直線も整い高さを表現した写真ができます。このアオリ効果は建築物だけでなく、高さのある山や巨木、滝、更にはポートレート等にも使う事ができます。

ピンホール写真撮影の実際。被写体は東大・安田講堂。

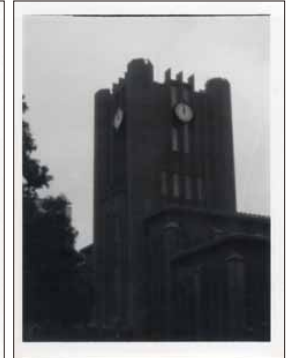
それでは実際に撮影を行います。東大・安田講堂と三四郎池の間の道脇にピンホールシャッターを装着した大判カメラをセットします。まずは蛇腹を広角位置にして、おおよその構図を確認しインスタントフィルムホルダーを挿入し、露出を決定しシャッターを数秒間切りました。次に蛇腹を標準位置にして、更に望遠位置にして続けて3カット撮影です。その結果が下写真の通りです。蛇腹の長さにより露光時間は変わりますがズームレンズで撮影したように画角の違うピンホール写真の完成です。



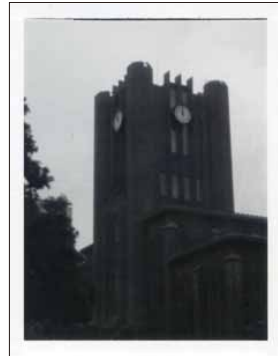
《広角ピンホール写真》



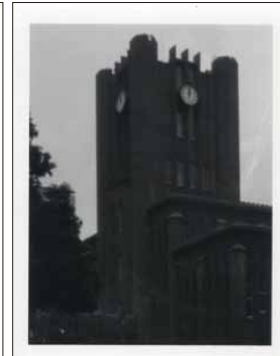
《標準ピンホール写真》



《望遠ピンホール写真》



《アオリ無しピンホール写真》



《アオリ有りピンホール写真》

そして、いよいよピンホール写真のアオリ撮影です。普通の状態では安田講堂上部を構図して1枚、次にバックアオリを垂直にしてもう1枚撮影です。左右の写真を見比べると講堂の垂直線の相違が確認できます。どちらが安田講堂らしいかお解りです。大判カメラはピンホール写真を撮影するにも適している大変楽しいカメラです。

貴方もチャレンジしてみませんか。



ワズオリジナルのピンホールシャッターについてワズオリジナルのピンホールシャッターは各種ワズオリジナルのピンホールカメラに早変わりします。構図用1.8ミリと撮影用0.3ミリの2穴仕様がワズ価格8000円+税となります。ポートへの取付けは、お使いの大判カメラのポートを用意して、ピンホールシャッターの後面の接着テープをはがして中心を合わせて貼付けるだけです。これだけでピンホールシャッターの完成です。

ワズオリジナルのピンホールシャッターは通常のピンホールカメラと相違し、撮影用の0.3ミリ穴と構図確認用の1.8ミリ穴があります。左の上写真の様に上部レバーを右に倒し1.8ミリ穴を使いピンホールカメラを使うとした画像ですが、構図を確認します。構図が決まれば写真中の様にレバーを立てて露光しない状態にしてフィルムホルダー等を挿入します。準備ができたならレバーを左側に倒し露光開始です。

《ピンホールシャッターの露出ピンホール写真で問題になるのは、ピンホールのF値と露出の長さです。大判カメラを使う場合、焦点距離(蛇腹の長さ)を決めてピンホールの直径が分かればF値を決めることができます。F値の求め方は左記になります。

例えば、広角90ミリがF3.0、標準150ミリがF5.0、望遠210ミリがF7.0となります。おのおの露出計で出したシャッター速度で撮影する訳ですが露出計には通常F3.0、F7.0、F10.0などの表示がありません。そんな時は左のような露出換算サークル(スケール)等を事前に用意すると便利かもしれません。(インターネット等で入手可能です。ご利用ください。)

ピンホールの直径(mm)
F値 = 焦点距離(mm) / ピンホールの直径(mm)

一度は行ってみたい 写真撮影の聖地・上高地。

《撮影地紹介》

写真撮影をする皆さんはもちろん「上高地」をご存じですね。別名・日本のスイスとも呼ばれ、登山者、トレkker、ハイカーから一般の観光客まで大変人気の長野県飛騨山脈南部の梓川上流にある山岳勝地です。その秘密は何と言っても大自然の宝庫でありながら、比較的安易に行くことが出来るエリアであることです。写真家にとっても、穂高連峰の山岳写真、梓川、大正池、田代池、明神池、岳沢の清らかな水の写真、更には足元の高山植物写真などあらゆる写真が撮影できます。今回はこの上高地の大正池から梓川上流に向かう明神池までのカメラを持ってゆっくり撮影できるコースを紹介し、登山経験が無くても十分に撮影が楽しめますので是非お訪ねください。



河童橋から 穂高連峰を臨む。



河童橋明神自然探勝路沿い 岳沢の流れ込み。



明神池 絶好の撮影スポットです。



【1】大正池～河童橋、【2】河童橋～明神池はどちらもトレッキングで約1時間の行程ですが撮影にはゆっくりと時間を掛けましょう。上高地に着いた初日に大正池～河童橋を撮影し、宿泊を河童橋付近のホテル・旅館にして2日目の早朝は田代池の撮影、午前は河童橋明神池探勝路を歩いて湿原、岳沢の流れ等を撮影し昼前に明神池に到着、午後は梓川左岸を歩き小梨平等での撮影は如何でしょうか？

上高地公式ウェブサイト <http://www.kamikochi.or.jp>



「岳沢の秋」



「梓川畔」



「梓川」



「新雪を積った穂高連峰」



「岳沢からの流れ」



「明神岳のカラマツ(梓川の河原から)」

上高地の魅力

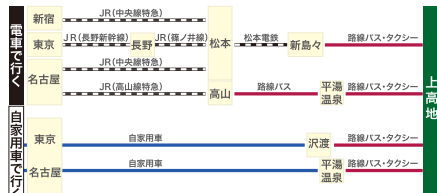
日本リノフクラブ会長 川太 泰夫

上高地の魅力は、何と言っても5月の連休から11月の初めまでいつ出掛けても撮影対象に溢れていることです。それに、明神池や徳沢までちょっと足を伸ばせば、また趣の異なる作品づくりが可能です。穂高の峰頂と噴煙あがる焼岳、梓川の清流に加え、小梨の新緑、ニリンソウやジャクナゲの花々、落葉松の黄葉……。西穂高の稜線から見る蛇行した梓川や岳沢から望むホテルの赤い屋根が溢れる上高地も素敵。



体力に自身のある方には真冬に行くことをお勧めします。釜トンネルからの歩きとラッセルが要りますが、天気さえ良ければ静寂の中で一日たっぷり撮影できます。以前スキーを履いた小学生の団に出会ったことがあります。本当に新鮮な世界を写し止められますよ。是非上高地にお出かけください。

Access



編集後記 会報誌・マミヤギャラリーの発行ですが制作にはかなりのウエイトが掛かります。そして皆様の最大限のご協力があって出来る感謝しております。巻頭企画の吉村和敏さんの特集では国内外の取材で超多忙な中、無理を言って数時間を頂きインタビューを敢行しました。この人を訪ねてのラムダ社・佐久間社長には駅まで車で送り迎えして頂き、お仕事を数時間中断して対応頂きました。上高地特集では川太泰夫さんに写真を多数お借り致しました。また、ユーザーを訪ねても、農業で朝から夜まで働いている金田大樹さんに作品のセレクトから原稿執筆まで全てお任せしてしまいました。この様に皆様のご協力がなければマミヤギャラリーは完成致しません。今号がお手元に届いている会員、写真家、業界関係の皆様、次号以降にご協力をお願いする事もあるかと思っておりますのでその時は宜しくお願い致します。事務局 木戸 嘉一